



Sports Expert 対談

夢の頂点へ 一歩、一歩。

スポーツの分野で活躍している校友は、アスリートばかりではない。スポーツ新聞記者として、アナリストとして、トップアスリートたち、どう「絆」や信頼関係を築いてきたのか。ロンドン五輪にも関わったお二人に、とっておきの裏話やエピソードをうかがった。司会 ■「アドニス」編集部

番記者の仕事、アナリストの仕事。

編集部 ■ 首藤さんは卒業後、「日刊スポーツ」に入社されましたが、大変だったことはありますか。

首藤 ■ いやあ、最初は思っていたのと全然、違いました。僕はスポーツ部に配属され、有名選手・監督にベタッと付いて回る、番記者をやりました。

自分を覚えてもらうのはもちろん、気軽に話してもらったり、情報を提供してもらえぐらい信頼されることが最低限、求められます。まったく知らない人に、いかに食い込むか。仲良くなるというわけでもないですが、「絆」のようなものを築いていく感じです。

編集部 ■ それは、スポーツでも仕事でも、同じでしょうね。「絆」っていう話が出たんですけど、選手たちとの「絆」、渡辺さんは最初からうまくいったんですか。

渡辺 ■ バレーボールのチームに行くと、私なんか競技者としては高いレベルではありません。それがデータを取ってきて、戦術がどうのこうのという話をするわけです。当時は僕より年上の選手ばかりですし、「何よ、この若造が」という感じもありました。

ただ、そうした中でもチームのためにボール拾いや雑用などもやって、日々、信頼を勝ち取るように努めました。そういう点では、番記者のお話と似ていると思います。

首藤 ■ 僕は元横綱の曙太郎の、番記者をやっ

たことがあります。K-1に転向して、ちょうどボブ・サップとやる頃です。最初、名刺を出しても見向きもしない。「ああ」って言うくらいです。次の日、行っても同じです。「もう来るなよ」なんて言われても、また次の日、行って。毎日、ジムの前で待って1週間ぐらいすると、「寒いから、受付で待てよ」みたいなことを言い始めて。

編集部 ■ 少し気遣いというか。
首藤 ■ そうです。掲載されている新聞や昔の写真や、毎日のように渡しているうちに、「今日、こんなトレーニングやったんだよ」とか、だんだん話してくれるようになりました。

あるとき行かないと、「あれっ、きのう、いなかったけど、どうしたんだ」なんて向こうから言うようになって。

編集部 ■ お話を聞いて、普通のビジネスでも、たとえば営業の人が知らない会社に、新規開拓でアプローチしていくのと同じかなと思いました。

首藤 ■ あっ、それは同じだと思います。
編集部 ■ 渡辺さんにお聞きしたいのですが、アナリストは新しい職業です。何か失敗されたご経験はありますか。差し支えなければ。

渡辺 ■ たとえば、ブラジルと試合をやるときは当然、私なりにブラジルを分析して、選手たちに情報を提供します。選手たちは当然、何回もブラジルとやっています。

そのときは、たまたま前日にブラジルとロシアの試合があり、「ブラジルの特徴はこう

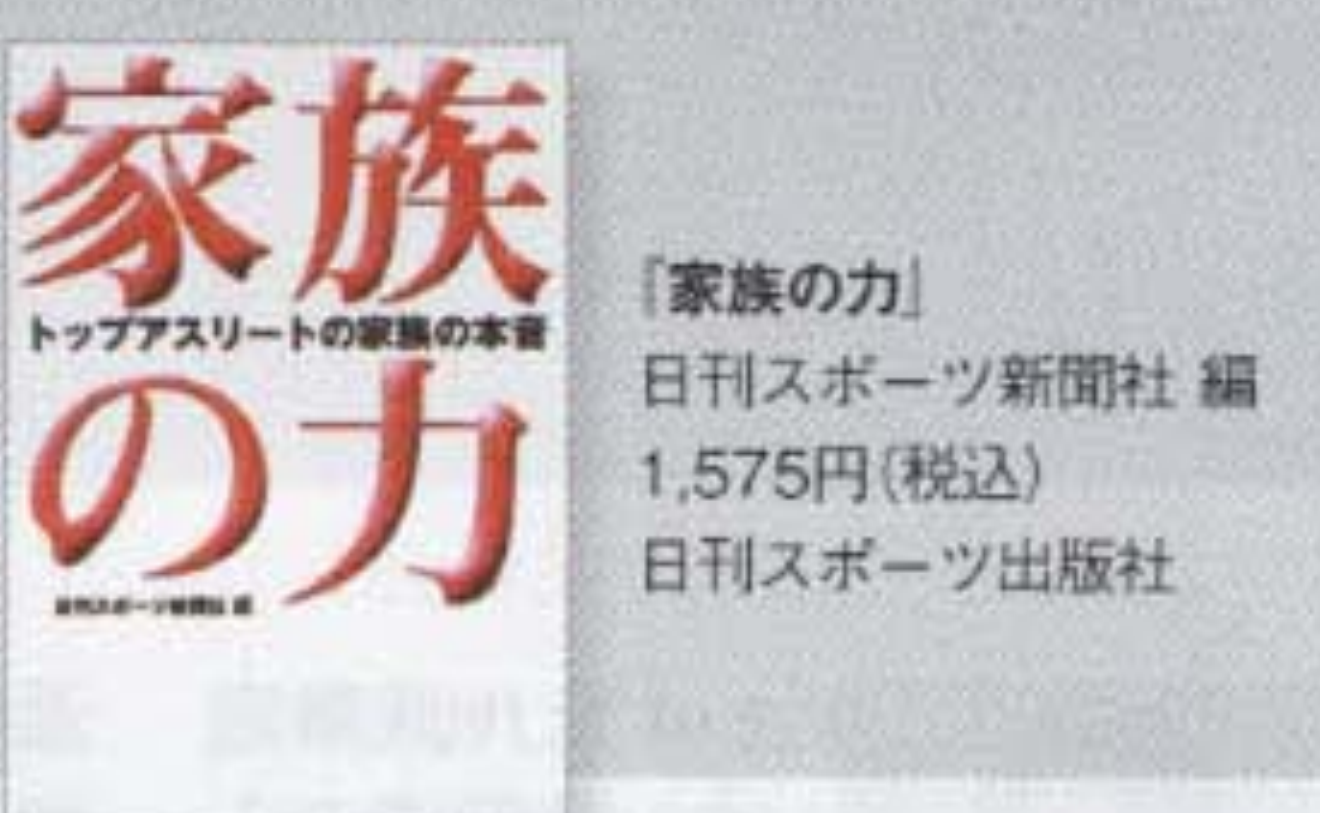


われら専修人
[スポーツ編] File No.99

首藤正徳

日刊スポーツ新聞社
写真部長

しゅう まさのり ● 1988 (昭和63) 年、経済学部経済学科卒業。1965年生まれ。大分県出身。卒業後、日刊スポーツ新聞社入社、記者としてボクシングや五輪を担当。2005年よりスポーツ部デスク。08年の北京五輪、12年のロンドン五輪の統括デスクを務める。12年11月より現職。



『家族の力』
日刊スポーツ新聞社 編
1,575円(税込)
日刊スポーツ出版社

です。こういう攻撃が多い」と、ミーティングで報告しました。ミーティングが終盤に差しかけた頃、選手の一人が、「でも日本とやるときは違うよね。そこを見てない」って指摘されました。

編集部 ■ 鋭い。

渡辺 ■ ロシアと日本は、身長が1番高い国と1番低い国です。ブラジルの戦い方は、当然変わってきます。そうした点に気づかず、いま振り返ると、すごい稚拙な考え方だったかもしれないですね。そういう感じで選手からチクリチクリと、教えてもらいながら(笑)。

ただ、日本のトップ選抜された選手たちが、集まっている場での自分の失敗や間違いに対する気づきというのは、大学での失敗と大きさが違いますし、「絶大なる力」になりました。

編集部 ■ そういう反省が、自分の力になっていくんでしょうね。

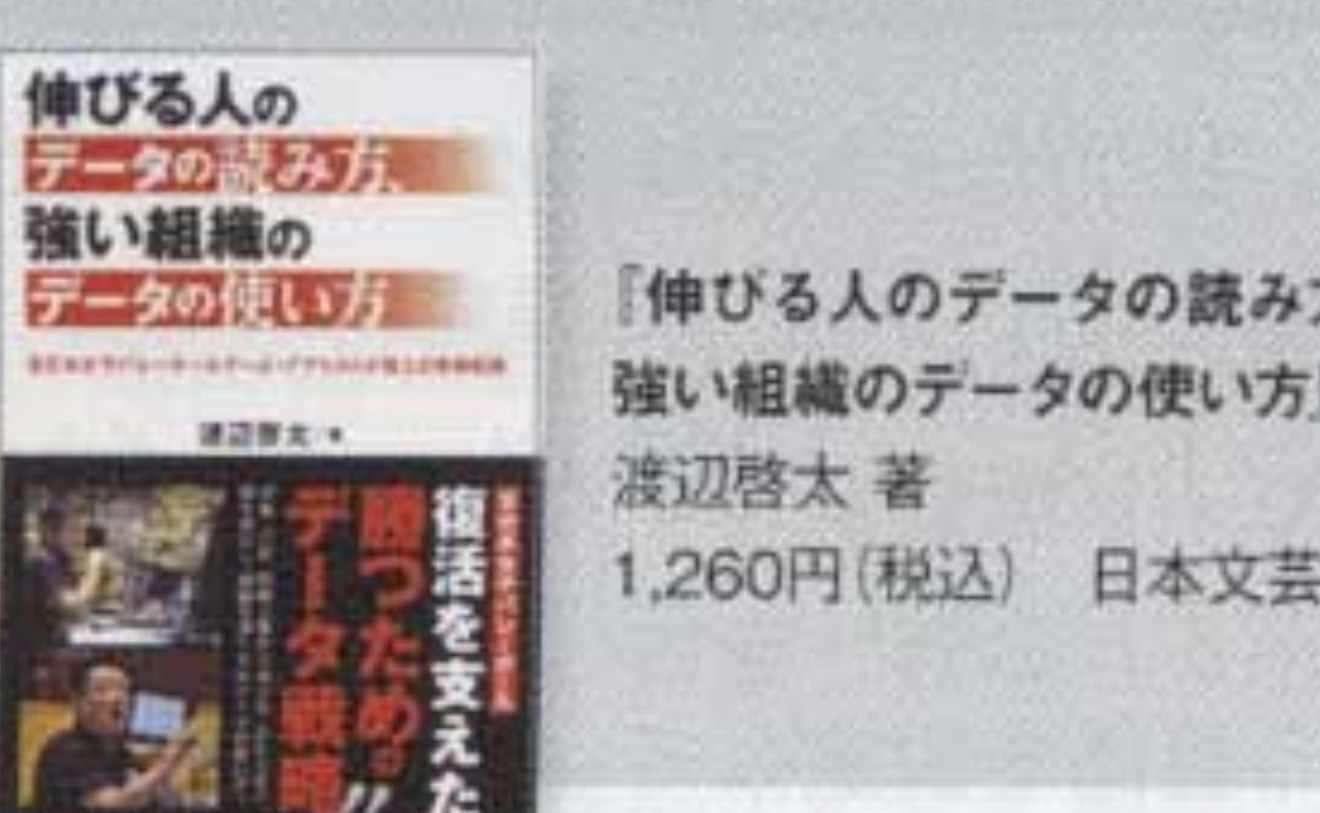
渡辺 ■ たとえば、つくった資料で1文字、間

われら専修人
[スポーツ編] File No.100

渡辺啓太

全日本女子バレーボールチーム
アナリスト

わたなべ けいた ● 2006 (平18) 年、ネットワーク情報学部ネットワーク情報学科卒業。1983年生まれ。東京都出身。バレーボールアナリスト(データ戦略分析スタッフ)。卒業後は、日本バレーボール協会と契約。2008年の北京五輪、続いて12年のロンドン五輪でも、チームの勝利に貢献。



『伸びる人のデータの読み方、強い組織のデータの使い方』
渡辺啓太 著
1,260円(税込) 日本文芸社

違ったことがありました。ミーティングで選手全員に配ってから、監督がこう言いました。「みんな、渡辺が配った資料を破れ！」

編集部 ■ きつい(笑)。

渡辺 ■ 「こいつは正しい情報を、みんなに提供するためにいるのに。これじゃ、もう話にならない！」

首藤 ■ へえーっ、厳しいですね(笑)。

渡辺 ■ はい。それは本当にちっちゃいことなんですけど。ミーティングの始まる数時間前、対戦相手の中国の選手が怪我していることが分かりました。慌てて選手の番号の差し替えをやったら、一部が直っていなかった……。次から資料をつくる時の神経は、研ぎ澄まされるようになりました(笑)。

首藤 ■ これ、柳本(晶一前監督)さん？

渡辺 ■ そうです。柳本さんには、本当にいろいろ教えていただきました。

ロンドン五輪の報道や競技の舞台裏を語ろう。

首藤 ■ そうした積み重ねが、ロンドン五輪で結実した。

編集部 ■ お二人ともロンドンに、いらっしたんですね。

首藤 ■ いや、僕は会社の中で、ロンドン五輪統括デスクをやっていました。ロンドンに行っている、記者たちの司令塔みたいな役です、北京オリンピックに続いて。

バレーボール女子が準決勝に出るので、記者二人体制でやるとか、そんな感じの指示をしていました。

編集部 ■ 行けば行ったで、大変だったでしょうけど。

首藤 ■ 記者っていうのは、かわいそうなので、たとえば自分の担当が柔道ならその競技しか見られないですよ。会社にいると、あらゆるスポーツが見られる。

編集部 ■ 紙面を考えながら、どの競技にスポットを当てるとか、記者を配置していくみたいな、その統括を全部やられたんですね。

首藤 ■ ロンドンとは時差があるため、24時間体制で、まったく時差ボケ状態でした。

編集部 ■ いつ寝ていたんですか。

首藤 ■ いや、もうそのときそのときで、時間が空いているときにパッと寝ちゃう(笑)。

編集部 ■ 細切れ睡眠っていうか。それも、けっこう大変ですね。記者では当たり前ですか。

首藤 ■ 当たり前ですし、むしろ寝るより見たいという気持ちが強かったですね。

渡辺 ■ 現地に行くと、オリンピックって見られないですよ。

首藤 ■ 渡辺さんもバレーボール以外、まったく見てないですよ。

渡辺 ■ 選手村には日本棟があって、「今日は、どこがメダルを取りました」といった記録がベタベタ貼られます。それを見て「ああ、良かったね。勝って」というくらいです。

編集部 ■ ああ、そうか。そのベタベタで初めて分かった(笑)。

渡辺 ■ NHKが見られるわけじゃないので、テーマソングが「風が吹いている」だったって知ったのは帰国してからです。「総集編」を見て、「ああ、こういう歌だったんだ」(笑)。

編集部 ■ 開会式も、見なかったんですか。

渡辺 ■ 開会式の次の日、朝9時から試合だったんで、行かなかったですね。選手村で、テ

レビは見てましたけど。
編集部 ■ ジャあ、ほとんど選手村と会場の往復みたいな感じですか。

渡辺 ■ もう、ずっとそうでしたね。

編集部 ■ ちょっと、かわいそうっていうか(笑)。

渡辺 ■ どこに行ってもそうですよ。世界のどんないいところに行っても、だいたい体育館か、ホテルにしかないんですから(笑)。

首藤 ■ ホテルと試合場の往復だけ。でも、記者はその間に、観光とかしなきゃいけない(笑)。

編集部 ■ そうなんですか。

首藤 ■ そうなんです(笑)。見識を広めなきゃいけない(笑)。

編集部 ■ なるほど。そういう大義名分があるわけですね。アナリストは勝てばいいけど、勝ったあとは遊びに行ったり、ちょっと骨休めできるかもしれないけど。

渡辺 ■ 試合後も、すぐまとめを要求されます。試合を通しての反省ですね。そうすると「メダルを取った、取った」と、みんなが盛り上がる横でカタカタ、カタカタ……(笑)。

編集部 ■ 渡辺さんは、すごく忙しいとき、仕事をこなしていくコツとかって、あるんですか。

渡辺 ■ 忙しい中でも監督や選手、スタッフと、コミュニケーションを欠かさないことが大事です。そういう中から、「この選手は、こういうことに興味がある」、「こういう情報が、求められるだろう」などを感じながら準備しておきます。

それによって選手が、コーチが、監督が欲しいと思ったときに、吸収しやすい形で情報を出さないと意味がありません。

編集部 ■ 要するに「これが欲しい」というのを、目の前に出せば食いついてくる。

渡辺 ■ 特に試合期など忙しいですし、選手も興奮していますので、いかに吸収できるかには、とてもこだわっています。

首藤 ■ アナリストっていうと、自分の世界にこもっているイメージがありますよね。でも、アナリストはコミュニケーションのプロなんだ。

編集部 ■ 人間観察のプロ、コミュニケーションのプロじゃないと務まらない、ということですね。本日は、とてもいいお話を聞きました。ありがとうございました。

(2月12日) 神田校舎6号館にて 敬称略

※お二人の好きな言葉やモットーは、引き続き29ページの「ア・ラ・カルト」で。